教師を育てた
言葉たち

No. 009

北海道岩見沢農業高校
熊谷孝宏先生
くまがい・たかひろ

◎教職歴 26 年。同校に赴任して 5 年目。キャリアガイダンス部長。英語科。

北海道岩見沢農業高校 全日制／農業科・畜産科・食品科・生活科・森林科・農業土木工学科、環境造園科／共学／1学年約 280 人／ 2018 年度進路実績（現役のみ）：4年制大は、帯広畜産大などに45人が合格。短大、大学校、専門学校進学 83 人。就職121人（うち公務員25人）。

教職４年目、初めて担任を受け持ったクラスは、その年度で閉科となる商業科の３年生でした。学力的に厳しく、生活態度にも課題が見られる生徒たちとどう向き合えばよいのかと、不安でいっぱいの私に、「あなたの売りは若さだ。それに加えて、もう１つ強みをつくらないか」と、教頭から提案されました。自己肯定感が持てず、何事も諦めがちな生徒に、小さなことでも積み重ねれば大きなことを達成できると、「先生自らが継続する姿を示してほしい」と言われたのです。

教頭の言葉を自分なりに考え、毎日、学級通信を出そうと決めました。１枚１枚は薄くても、１年間書き続ければ相当な量になります。連絡事項や行事予定、学習のアドバイスなどを書き、毎朝、生徒が登校する前に机の上に１枚ずつ置いて、重要なことはＳＨＲでも話すようにしました。停滞していたクラスの雰囲気を何とか変えたいと奮闘しましたが、生徒との関係は良好と言えるものではありませんでした。ただ、私にできることはこれしかないと、学級通信を書き続けたのです。気づけば、１年間で約 200 枚、とじると厚さ２㎝程の冊子になりました。そして、卒業式の日、積み重ねることの大切さを感じてほしいと願いながら、一人ひとりに冊子を手渡しました。

生徒のためにと思って続けていた学級通信でしたが、それで学んだのは私の方でした。生徒一人ひとりをよく見ること、どんな行事でもその目的を理解して取り組むこと、１年間の流れを見通して指導を考えることなど、どれも書くという作業を通じて気づかされたことです。また、仕事の段取りも改善しました。予定外の仕事が入っても、学級通信を書く時間を確保するよう意識して進める習慣が、毎日続けることで身についたからだと思います。

その後も、担任を持つ度に学級通信を書き続けました。生徒の状況を見て、伝えるべき内容や時期を判断できるようになったからなのか、「小論文のヒントを得ました」「自分が学びたいことに気づきました」などと、生徒から言われるようになりました。また、「あれは自分に向けた言葉ですよね」と、私のメッセージに気づく生徒もいました。そうすると、生徒をもっと触発させたいと思い、外部の研究会に参加して学級通信のネタを探すなど、一層力が入りました。学級通信は、生徒とのコミュニケーション方法の１つであり、自分の指導力を高める軸にもなっていました。

年度初めには、学級通信を床に落としても、そのままにする生徒がいます。私はすかさず、「人が時間をかけて作ったものを大切にできない人間は、大成しないぞ」と大げさに叱ります。その時はピンときていない生徒も、毎日机の上に置かれ続けると次第に学級通信を読むようになり、継続することの大切さを説くと深くうなずきます。言葉だけでなく、行動してこそ伝わることがあるのだと実感します。

今はＳＳＨ担当者として、週１回のＳＳＨ通信を出しています。実験や実習、大学訪問など、盛りだくさんの活動を見通して取り組めるように書くのがポイントです。毎日ではなくても、続ければ必ず伝わると信じ、自分の姿を示し続けたいと思います。